『足臂十一脈灸經』文字攷

林　克

一　はじめに

長沙馬王堆漢墓三號墓から帛書・木簡・竹簡が出土して三〇年になる。この間、多くの釋文・研究が發表され、當然のこととして馬王堆漢墓出土資料の解讀は進展した。この時間の經過に伴う研究成果の蓄積と、新たに取り組まなければならない出土資料の出現により、馬王堆出土資料に關する最近の研究は多いとは言えない。それにも拘わらず、昨年に引き續き[1]、今回も馬王堆出土資料を扱ったのは、放置されたままの未解決の問題、あるいは解決濟みと一般的に受け取られているが實は疑問を殘したままになっている問題がなお馬王堆出土資料には存在するからである。今回は馬王堆漢墓醫書『足臂十一脈灸經』（以下、『足臂』と略稱）を取り上げるが、前回同樣、紙幅の制約から十一脈中の六脈の主要な問題點を論じた。

テキストは『馬王堆漢墓帛書』肆（文物出版社、一九八五年三月）所掲の『足臂』を用いた。考察對象の六脈の冒頭に示した各脈の本文において、〔　〕は讀替、〈　〉は缺落・缺損の補足、【　】は脫落字の補足を示す。『足臂』においては十一脈に對する同じ記述パターンが繰り返されること、および馬王堆漢墓醫書『陰陽十一脈灸經』（以下、『陰陽』と略稱）や『靈樞』經脈篇（以下、經脈篇と略稱）と內容的に相互に關聯することなどから、『足臂』の缺損字・脫落

字は、當該文字をほぼ確實に推定できる場合が少なくない。缺損字・脱落字が推定できる場合にはそれを原文に表記した方が良いと考える。その様な場合に〔　〕【　】を使った。論述の過程で使用する用語において、「讀む」とは出土資料の文字の字形をよみとること、「訓む」とはその意味をよみとること、「解す」とは某字であると解釋することである。「缺落」とは出土資料が破斷して存在したと思われる文字部分が完全に缺落する狀態、「缺損」とは出土資料が破斷して文字の一部分が存在し、一部分が存在しない狀態、「脱落」とは缺損がなく、文字を明確に認識できる狀態の出土資料において存在が想定される文字が脱落して存在しない狀態である。

なお、本稿「二」で使用する資料の略稱は次の通りである。

『甲本』――馬王堆漢墓醫書『陰陽十一脈灸經』甲本
『乙本』――馬王堆漢墓醫書『陰陽十一脈灸經』乙本
『張家山本』――張家山漢墓醫書『陰陽十一脈灸經』
『太素』――仁和寺本『黄帝內經太素』
『甲乙』――醫統正脈本『鍼灸甲乙經』
『病法』――『五十二病法』（文物出版社、一九七九年一一月）
『研究』――『新發現中國科學史資料の研究　譯注篇』（京都大學人文科學研究所、一九八五年三月）
『索引』――『馬王堆出土醫書字形分類索引』（「中國古代養生思想の總合的研究」研究成果報告書之二、一九八七年三月）
『考注』――『馬王堆醫書考注』（樂羣文化事業有限公司、一九八九年一二月）
『（壹）』――『馬王堆漢墓醫書校釋（壹）』（成都出版社、一九九二年六月）

『校釋』――『馬王堆古醫書校釋』（湖南科學技術出版社、一九九二年一一月）

二　『足臂十一脈灸經』の文字の再考

（一）足太陽脈

足、足泰〔太〕陽温〔脈〕（i）、出外踝窶〔婁〕中、上貫膊〔腨〕、出於卻〔郄〕（ii）、枝之下膊〔肘〕（iii）、其直者貫□、夾〔挾〕脊、□□、上於豆〔頭〕、枝顏〔顏〕下、之耳、其直者貫目內漬〔眥〕、之鼻。其病、病足小指廢、膊〔腨〕痛、胎〔脚〕緣〔攣〕、脽〔脽〕痛、產〔產〕（iv）寺〔痔〕、要〔腰〕痛、夾〔挾〕脊痛、□痛、項痛、手〔首〕痛、顏寒、產〔產〕聾、目痛、尪〔鼽〕汋〔衄〕、數癲〔癲〕疾、●諸病此物者、皆久〔灸〕泰〔太〕〔陽〕温〔脈〕、

（i）脈――帛書は「温」に作る。「温」について、馬王堆漢墓帛書整理小組「馬王堆漢墓醫書釋文〔一〕」[2]注（3）は二説を述べる。一説は、この字を「溫」と讀み、「溫」は「筋」即ち「腱」の假借で、本篇が記述するものは十一經筋であるとする。また『靈樞』經筋篇（以下、經筋篇と略稱）の「經筋」は「經筋」の誤りで、これまでに經筋篇としてきたものは正しくは經筋篇であって、本篇の十一經筋に對應すると考える。もう一説は、この字が「脈」の異體字で「目」と「衈〔脈〕」から成り、『足臂』足厥陰脈に後附する三陰脈死候[3]に見える「溫絕」の「溫」は「温」の書き誤りとする。『病方』『帛書』は後説に從って「脈」と解し、『甲本』が「脈」を「眡」に作るのと同樣のこととする。『索引』

は「溫」の項に入れる。ただし、「溫」は『病法』において「目」でなく「日」に従う。

古音は「溫」が影紐・文部、「腱」が群紐・元部、「筋」が見紐・文部、「脈」が明紐・錫部であり、「溫」「筋」は隣紐・疊韻、「溫」「腱」は隣紐・旁轉の關係となり、「溫」と「脈」には通常の音韻的關係は見いだせない。音韻的關係から「溫」と「筋」および「溫」と「腱」はどちらも通假しうるが、その關係は「溫」と「腱」より、「溫」と「筋」の方が緊密である。また、經筋篇の十二經筋と本篇を對比すると、起止の記述が手足の末端に近い方から體幹部へ向かう點に共通性が見られる。「溫」と「筋」の音韻的關係および本篇と『靈樞』の十二經筋における起止の方向性の一致という二點から、「温」は「溫」すなわち「筋」の可能性があると言える。「溫」すなわち「腱」の可能性についても同様の事が言えるが、「溫」との音韻的關係の緊密さで「腱」は「筋」に劣る。しかし、本篇の足厥陰温・臂太陰温・臂少陰温に明確な「筋」字が存在することは、「温」が「筋」であるよりは「腱」である可能性を示唆する。つまるところ、「温」が「筋」である可能性と「腱」である可能性の優劣は單純には決めかねる。

一方、本篇に記述される「温」の走向部位を經脈篇十二脈と經筋篇十二經筋の走向部位と對比すると、本篇の「温」の走向部位はより多く經脈篇十二脈の走向部位と一致する。また、本篇の病候を經脈篇十二脈および經筋篇十二經筋の病候と對比すると、本篇の病候はより多く經脈篇十二脈の病候と一致する。さらに、既述のように本篇の足厥陰温・臂太陰温・臂少陰温には明確な「筋」字が存在する。以上三點からは、「温」が「筋」である可能性は低く、「脈」である可能性が高いと言える。しかし、「温」が「腱」であるならば、本篇に明確な「筋」字が存在することと矛盾は生じない。この點では「腱」は「筋」に優り、音韻的關係の緊密さで「腱」が「筋」に劣る分を補うことができる。

以上、「温」を「筋」「腱」「脈」のいずれと判斷するのが適切かについて、音韻・走向方向・走向部位・疾病・筋字の存在の五項目を檢討した。「筋」「腱」「脈」三者はそれぞれが「温」と認めるのに適切な點と不適切な點を持ち、優

劣を附けがたい。強いて優劣を附ければ「脈」「腱」「筋」の順となろうが、「脈」は決定的な優位性を持たない。音韻・走向部位などのほかに「温」を「筋」「腱」「脈」のいずれと判断する材料は無いのだろうか。

山田慶兒氏はつとに「温」を「脈」と推定し、その根據を示している。

「足臂十一脈灸經」の死に至る症候を記述した一節に、「温」の打ちかたが三人で臼をつくみたいであれば、三日たたないうちに死ぬ、などといった表現がみえる。ここにいう「温」は、まぎれもなく血管を指す。「脈」は解剖學以前の素朴な、未分化な概念であった。[4]

「温」が「筋」「腱」「脈」のいずれであるかについて、山田氏の提示する根據がこれまでのところ最も説得力がある。本稿はこれに従い「温」を「脈」と解す。

(ii) 郄――帛書の字體について、『病方』『帛書』は「胳」と讀み、「卻」卽ち「郄」と解すが、直接的に「郄〔卻〕」あるいは「郄〔卻〕」と讀めることについては注(1)所掲の拙稿九四頁を參照願いたい。『病方』『帛書』は「郄」の例證として、『素問』刺腰痛論「在膝筋肉分間郄」の王冰注[5]を引く。「郄」を膝窩中央の郄中とすることは方向性としては正しい。『素問』刺禁論「刺郄中大脈、令人仆脱色」の王冰注[6]は「郄中」と「委中」を同一部位とし、「委中」は部位名、「郄中」は孔穴名とする。しかし、「委中」は屈曲部の中あるいは中央を意味して『甲乙』にも記載される孔穴名であり、「郄中」を隙間・くぼみの中あるいは中央を意味する部位名とすべきである。ヒカガミ(膝の裏側のくぼみ)を意味する「膕(膝窩部)」は見紐・職部、「郄」は溪紐・鐸部で、「膕」「郄」兩者は旁紐・旁轉の關係にあり、音韻的に通假の可能性が高い。『素問』刺瘧の「足太陽之瘧、令人腰痛頭重、寒從背起、先寒後熱、熇熇暍暍然、熱止汗出、難已、刺郄中出血」に對して、新校正が「詳刺郄中、甲乙經作膕中」といい、今本『甲乙』卷七陰陽相移發三瘧第五が「刺膕中出血」に作ることは「郄」「膕」通假の例證である。『素問』刺瘧・刺腰痛論の王冰注[7]には「郄中」を「委中也」

と解するものが四見し、刺腰痛論の王冰注が「郄中、委中也。在膝後屈處膕中央約文中動脈、足太陽脈之所入也」というのは、「郄」「膕」の通假が傳承されないために生じたことと考えるのが最も適切である。結果的には『研究』所引の何宗禹氏が「膕」と解するのと同じである。

（ⅲ）胂――帛書は「腺」に作り、『病方』『帛書』は上文の「下」と合わせ、部位を特定できないが人體の部位の名前とする。『研究』所引の何宗禹氏は「脽」と解す。『說文』卷八上尸部に「尻、脽也」、「尻、髀也、从尸下丌尻几。脽、尻或从肉隼（段注、隼聲也、與肉部脽字義同字異）。臀、尻或从骨殿聲」とある。「隼」は心紐・文部、「脽」は禪紐・微部である。『考注』はこの字を「从丌胸聲」で「臀」の異體字ではないかとする。『（壹）』はこの字を「胸」と同じであり、古音は昌紐・文聲と推定し、「臀」と同じく舌音で準旁紐であり、韻部は同じとし、結局「臀」の或體とする。『校釋』は「胸」の形を誤ったもので、日紐・眞部の「胸」を借りて書紐・眞部の「胂」を表したとする。「腺」が旬聲の諧聲字であるならば、音韻的には「胂」の假借と考えるのが最も妥當である。『說文』四篇下肉部に「胂、夾脊肉也」とあり、ここでは脊柱起立筋下部を指す。

（ⅳ）瀝――帛書は「產」に作る。この帛書は「產」を「生」の意味に使う、と『病方』『帛書』は云い、『研究』『考注』『（壹）』『校釋』は注釋或いは譯文においてこれに從う。ただ譯文は、『研究』は「痔の發生」とし、『校釋』は「痔瘡」として、「生」が產生・發生を意味する動詞であるはずにも拘わらず、そのことを譯に正しく反映させていない。『足臂』の「其病」以下における病ないし症候の記述を分析すると、（a）病名・症候名（例えば鼽衄・瘻）、（b）「動詞＋通常動作」で病狀・症候を表すもの（例えば、嗜臥・嗜飲・不嗜食）、（c）身體部位名＋病名・症候名（例えば心痛）、（d）數・善・多等の形容詞＋病名・症候名ないし病狀・症候を表すもの（例えば數癲、善噫、多溺、默々嗜臥）、（e）「以」「而」＋病名・症候名、に分類できる。この五分類に當てはまらないのが「產聾」「產痔」「產馬」であり、

五分類から類推して「產聾」「產痔」「產馬」も五分類に含まれるものと同じ原理に立つと考えるべきであろう。その場合でも（a）（b）（c）（e）は可能性が低く、「產」を（d）と同様の形容詞と考えるのが妥當である。しかし、「產」には形容詞として適當な意味がない。「產」と通假の可能性がある諧聲字に盛多を意味する「瀍」があり、「瀍聾」「瀍痔」であれば「ひどい耳聾」「ひどい痔疾」という意味になる。ところで「顏」について、帛書の字を『病方』『帛書』は「顏」と讀み、「顏」と解し、『校釋』は「顏」と「顏」はともに元部で互通すると云う。『病方』『帛書』の解釋を妥當と判斷する。「產」「顏」「彥」は諧聲字である。『韓非子』喩老篇の「毫芒繁澤」の「繁」を『淮南子』泰族訓は「顏」に作り、「顏」が「繁」と通假する。『足臂』の「產」が「顏」と讀まれていたならば、「產」は「繁」の通假であり得る。その場合、「繁」に盛多の意味があるので、「產」はやはり「ひどい」と讀む可能性がある。『禮記』大學の「人之彥聖」の鄭注は「彥或作盤」と云う。この「產」が「彥」と讀まれていたならば、「彥」は「盤」の通假であり得る。その場合、「盤」にも「盛大」の意味があるので、「產」は「ひどい」と讀む可能性がある。また、疑紐・元部の「彥」「顏」は雙聲・對轉の「俄」と通假の可能性がある。「俄」には「にわかに」という意味があり、「產」が「彥」或いは「顏」と讀まれたのであれば、「にわかな耳聾」「にわかな痔疾」と言うことになる。以上から、形容詞としての「產」には「ひどい」あるいは「にわかな」を意味する可能性がある。『素問』厥論に「少陽之厥、則暴聾頰腫而熱」、『靈樞』寒熱痛に「暴聾氣蒙、耳目不明、取天牖」とあり、「暴」には「ひどい」「にわかな」の兩義があって、「產聾」は「暴聾」に繫がるものと考えられる。「痔」の方には適切な形容詞が附いた例が見えないのは、「產痔」が傳承されなかったものであろう。「聾」「痔」「馬」だけにそれを引き起こすことを意味する動詞が附くのは再度考慮しても特異である。上記のように「產」を形容詞と解する方が妥當であり、上記の檢討の中では、音韻的な近さから「瀍」の通假と解す。

（二）　足少陽脈

●足少陽温〔脈〕、出於踝前、枝於骨閒、上貫𨎭〔膝〕外兼〔廉〕、出於股外兼〔廉〕、出脅、枝之肩薄〔髆〕、其直者貫腋、出於項耳、出腿〔頷〕（i）、出目外漬〔眥〕。其病、病足小指次【指】廢、胻外兼〔廉〕痛、胻寒、𨎭〔膝〕外兼〔廉〕痛、股外兼〔廉〕痛、脾〔髀〕外兼〔廉〕痛、脅痛、□痛、產〔瀝〕馬（ii）、缺盆痛、癥〔瘻〕、聾、腿〔頷〕痛、耳前痛、目外漬〔眥〕痛、脅外種〔腫〕。●諸【病】此物者、皆久〔灸〕少陽温〔脈〕、

（i）頷――帛書は「腿」に作り、『病方』『帛書』は「枕」と解す。『校釋』は「枕」が章紐・侵部、「甚」が禪紐・侵部で、「腿」を借りて「枕」とした、と云う。『病方』は「枕」を後頭骨隆起とする。「腿」が「甚」の諧聲字であるならば、「枕」の通假字と推定するのは妥當である。しかし、「枕」は外後頭隆起を中心とする後頭部を指すと思われ、傳承された足少陽脈の走行から少し外れる。『研究』所引の何氏は「顙」または「肫」と解す。『研究』は「肫」が妥當と云う。頭や頰を意味する「顙」、頰骨を意味する「肫」は、足少陽脈の走行との關聯で申し分ないが、「腿」との文字學・音韻學的關聯が不明ないし微弱である。つまり、從來の「腿」の釋文には再檢討の餘地がある。

「腿」を「甚」の諧聲字と假定する點は『病方』『帛書』や『校釋』に從う。「甚」の諧聲字の通假例では、冘・妣・忱・沈・耽・酖など「冘」の諧聲字が最も多く、或・跲・欽・龕など「今」の諧聲字がこれに次ぎ、さらに墋・𢡟・糝などの「參」の諧聲字、枯・砧などの「占」の諧聲字、糂・簪などの「朁」の諧聲字が續く。「腿」を「枕」と解するのは音韻的に妥當であるが、「枕」には上記の難點がある。「冘」の諧聲字には他にめぼしい候補がない。そこで「今」の諧聲字に着目する。『方言』卷十に「頷、頤、頷也。南楚謂之頷。秦晉謂之頤。頤・其通語也。」とある。「頷」は

「含聲」の形聲字、「含」は「今聲」の形聲字で、『方言』の郭璞注は「謂頷車也」という。「頷車」は「頰車」ともいい、經脈篇の膽足少陽脈の流注には目の鋭眥から別れた支脈が「下りて頰車に加わる」とあるので、「腿」の通假字にふさわしい。『方言』に見える「頷」は「今聲」の諧聲字ではないが、上古音は見紐・緝部で禪紐・侵部の「甚」と韻部が入陽對轉の關係にある。從って、「腿」の通假字の可能性がある。匣紐・侵部の「頷」と雙聲で侵談旁轉の「頤」を王力『同源字典』は同源字とする。「頤」も下あごを意味し、「腿」の通假字の可能性がある。以上、「腿」の通假可能な字として「頷」「頜」「頤」の內、音韻的な近さという點で「頷」を採用する。

（ii）馬――『病方』『帛書』は「馬刀俠嬰」の省略、または「瘮」と解す。『研究』は『病方』に「瘮者、癰痛而潰」及び「瘮者有牝牡、牡高膚、牝有空」とある「瘮」であろうとする。これは化膿性の炎症（腫れ物と糜爛）である。「馬刀俠瘿」は經脈篇の足少陽脈の所生病中に見え、腋下にできる赤くて堅く潰れない癰である。[8] 足少陽脈は「其直者貫腋」であるから、腋下の赤くて堅く潰れない癰である馬刀俠瘿がこの脈の病であって不都合はなく、その長い病名を略して「馬」或いは「瘮」と呼んだことは十分あり得る。なお、「俠」の諧聲字に腋下を意味する「脇」がある。また、『爾雅』釋詁下に「關關、噰噰、音聲和也」とあるが、『文選』南都賦の「嚶嚶和鳴、澹淡隨波」の李善注は「爾雅曰、關關噰噰、聲之和也」と云い、歸田賦の「關關嚶嚶」の李善注は「爾雅曰、關關噰噰、音聲和也」と云う。つまり、瘿・纓の諧聲字の嚶は「噰」と音通する。「噰」は癰と雙聲・疊韻であるから、瘿・纓と癰の通假が可能である。以上から「俠瘿」「俠纓」は「脇癰」と推定できる。恐らく「馬刀」が腋下の癰の通稱で、その後に「馬刀」を說明する「脇癰」卽ち「俠瘿」「俠纓」を加えたものが『靈樞』に見えるものであろう。

（三）足陽明脈

●足陽明温〔脈〕、循胻中、上貫𨇤〔膝〕中、出股、夾〔挾〕少腹、上出乳内兼〔廉〕、出脇〔嗌〕、夾〔挾〕口、以上之鼻。其病、病足中指廢、胻痛、𨇤〔膝〕中䐃〔腫〕、腹䐃〔腫〕、乳内兼〔廉〕痛、□外䐃〔腫〕、頞痛、尪〔鼽〕汸〔衄〕、數□〔欠〕熱汗出、脛瘦（i）、顏寒、●諸病此物者、皆久〔灸〕陽明温〔脈〕、

（i）脛瘦――『病方』『帛書』は「脛」を「胜」の誤りとし、「胜」は大腿上部から腰への移行部とする。『研究』は「脛」について『病方』『帛書』にほぼ従い、股の上部から腰に近い部分の名稱とし、「瘦」については「やせほそり」と譯す。『考注』所引の趙有臣氏は「脛瘦」のままで陰痿を意味すると云う。『校釋』は「脛」については『病方』『帛書』に従い、「瘦」については心部・幽部の「搔」の假借字とし、「胜搔」を陰部瘙痒と解する。これらの解釋の妥當性を簡單には評價し難いが、『足臂』において、足厥陰脈以外は「其病」が脈の走向にほぼ沿って記述されるという原則、および全身的症狀は「其病」全體の記述の中では後半部に置かれるという原則が認められることを考慮する必要がある。この原則からすると、「頞痛、鼽衄、數欠熱汗出、脛瘦、顏寒」という顏面の病候を主體に記述する文脈において「脛瘦」は顏面か全身かのいずれかとなり、腰部・陰部の病候がこの部分に記述されるのは異常なことである。從って「脛瘦」と讀める文字の讀みについて再考しなければならない。

『病方』『帛書』以來、この字を「脛」と讀むこと、換言すれば旁を「坐」〔「从」上「土」下〕と讀むことに關しては異論がない。「脛」と讀まれる字は、『帛書』の寫眞において、旁は「歪」〔「死」上「土」下〕に見える。ただ、今「死」と讀む部分は現在の我々の目から見た楷書的書體の「死」と讀めるということであり、馬王堆帛書に見える書體の「死」

ではない。馬王堆帛書の「死」の旁は人の左向きの側面を簡略化した「𠂆」のヴァリエーションに作り、楷書の「死」の旁「匕」と異なるものである。しかし、『秦漢魏晉篆隷字形表』巻四（四川辭書出版社、一九八五年八月）の死字に引く定縣竹簡五に見える「死」は楷書的書體の「匕」の旁を持つ。従って前漢代に楷書的書體の「死」が存在したことは確かであり、前漢代の早期にも楷書的書體の「死」が存在した可能性は充分ある。そこで、「至」は『龍龕手鑑』土部によれば「坐」の古文であるから、この「至」と讀める字は「脞」であった可能性を推定できる。ここで從來の說の妥當性を認めることができる。「脞」は「小也」「切肉」「脆也」を意味する。この様な意味を持つ「脞」と「瘦」が結合する場合、その言葉は「縮小」「細小」の如き意味となろう。二字で「縮小」ないし「細小」という意味であれば、この文字の位置を考慮して、「顏面のやせ細り」か「全身のやせ細り」を示すものと思われる。

旁の上部の「死」と讀んだ部分は馬王堆帛書内に限って言えば、「夗」に近い。「夗」の異體字に「夘」があり（『字彙』夕部）、「夘」は「卯」の異體字でもある（『古今韻會擧要』上聲・巧）。「卯」の小篆は「卯」で、「酉」の古文「卯」と混用される。つまり、「从」「死」「夗」「夘」「卯」「卯」「卯」のどれかである可能性がある。従って、「月」偏「至」旁と讀める字の旁の上部は「从」「死」「夗」「夘」「卯」「卯」「卯」のどれかである可能性がある。

「脞」の諧聲字「痤」は『說文』七篇下疒部に「痤、小腫也、从疒坐聲、一曰族㕒」とあり、小さな腫れ物または族㕒（痒みを伴う皮膚病）を意味する。「瘦」については、先に「やせ細り」「萎縮」「瘙痒」と解されたことを述べた。「痤」が皮膚病であるとすると、三解のうちでは特に痒みを特徴とする族㕒すなわち疥癬との關聯から「搔」の通假字と解するのが最適と考える。また、小腫であっても「瘙痒」は矛盾を生じない。以上により、「脞瘦」は「痤搔」即ち「痤瘙」の可能性がある。

「脞」は目偏の「眦」の異體字ないし通假字の可能性がある。『說文』四篇上目部には「眦、小目也、从目坐聲」とあ

る。「小目」は眼瞼裂が小さいことを意味すると思われるが、萎縮を意味する可能性がある「瘦」とともに「眯瘦」と熟す場合、「小目」は眼瞼裂の病的な収縮か、眼球の萎縮を意味する可能性があり、また「眯瘦」二字で同じく眼瞼裂の病的な収縮か、眼球の萎縮を意味する可能性がある。顔面部における『足臂』の陽明脈に目との關聯を示す記述はないが、『陰陽』の陽明脈には「目の外廉に出づ」とあり、『素問』熱論篇に「陽明主肉、其脈俠鼻絡於目、故身熱目疼而鼻乾、不得臥也」、『靈樞』寒熱病に「足陽明、有挾鼻入于面者、名曰懸顱、屬口、對入繫目本」とあって、漢代に陽明脈と目との關聯を認識していたと推定できる。

「脞」の旁の上部が「夗」であれば、肉月で旁は「夗」上「土」下という文字になり、「脞」の旁の上部が「夘」であれば、旁は「夘」上「土」下になる。この様な字は現在まで傳承されておらず、また過去にあったという記録もないようである。肉月で旁は「夗」上「土」下という字が「夗」の形聲字であり、肉月が「月」ではなく「目」であったとすると、「眢」の假借字の可能性が出てくる。『說文』四篇上目部に「眢、目無明也、从目夗聲、讀若委」とあり、「眢」は視力がないことを意味する。「眢」と熟する「瘦」としては「瞍」が相應しい。同じ目部に「瞍、無目也、从目叟聲」とあり、段注によれば無目とは眼球がないことである。「眢瞍」は視力障害・目盲を意味しうる。

「脞」の旁が「夘」上「土」下である場合、「卺」〔「卯」上「土」下〕と同じであるから、ここで「脞」の旁の上部が「卯」の場合の考察と同時に行う。『集韻』上聲三四果で「坐」は「卺」の或體、去聲三九過で「坐」は「卺」の古文といい、「卯」の形聲字としての「卺」も過去に存在したかもしれない。「卺」が「卯」の形聲字である場合、「脞」すなわち「脞」として、「卯」の諧聲字ないし音通字を調べると、『集韻』平聲一九侯に「貿、目不明皃」とある。「貿」と熟す「瘦」としては、「眢」と同じく「瞍」が相應しい。「貿瞍」は「眢瞍」と同じく視力障害・目盲を意味しよう。

「卯」の小篆は「卭」である。「卭」に似た字に「兜」がある。「脞」の旁の上部が「兜」であれば、旁は「兜」上

「土」下になる。この様な字も現在まで傳承されておらず、また過去にあったという記録もないようである。しかし、この字が、肉月の代りに偏が「目」で、「兆」に従う字であった場合、「瞽」の異體字である可能性がある。楊樹達『積微居小學述林』卷二「釋兆」は『說文』八篇下兆部の「兆、靡蔽也、从儿、象左右皆蔽形、讀若瞽」および四篇上目部の「瞽、目但有朕也、从目鼓聲」を引き、「兆者瞽之初字也」と推定するが、妥當な推定と考える。「脞」は「目」に従い「兆」に従い「土」に従う字である可能性があり、その場合には「脞」は「瞽」の異體字であることが推測できる。「脞」が「瞽」であるならば、「瘦」は當然「瞍」であり、「瞽瞍」は視覺障害・盲目を意味すると共に、舜の父の瞽瞍・瞽叟に通じる。

「脞」の旁が「酉」の古文「丣」と「土」から成る場合、旁の形は「垩」となるが、「留」が「留」と書かれるように、「垩」とも書かれるはずである。「脛」も現在まで傳承されておらず、また過去にあったという記録もないようである。これが「丣」の諧聲字であると假定すると、「瘤」の通假字であった可能性が考えられる。『說文』に依れば、「瘤、腫也」であり、「瘤」と意味的に熟す可能性のある「瘦」の通假字としては「瘻」がある。『周禮』夏官・序官の「廋人」に鄭玄は「廋之言數」といい、山紐・幽部の「廋」と山紐・侯部の「數」が通假することを示す。『楚辭』九歎に「步從容於山廋」とあるが、洪興祖補註は「廋一作廋、一作藪」といい、「廋」と心紐・侯部の「藪」が通假する例を擧げる。『集韻』上聲四五厚には「藪・椒・蔓、說文、大澤也、…或作椒、亦從叟」という。これらから、「叟」と「數」「藪」の通假は明らかであり、「叟」と「婁」の通假も示唆する。これにより、「瘻」が「廋」の通假字の可能性があるといえる。『淮南子』說山訓の「貍頭愈鼠、雞頭已瘻」の高誘注に「瘻、頸腫疾」とある。「脞廋」が「瘤瘻」であるならば、腫瘤・腫瘍一般や頸部の腫瘤・腫瘍を意味する。

以上の考察により「脞瘦」およびその通假字の意味として考えられるのは、顏面ないし全身のやせ細りと思われる

「脞瘦」、痒みを伴う皮膚病「痤搔」、眼瞼裂の病的な收縮か、眼球の萎縮と思われる「睦瘦」、視力障害・目盲である「眢瞍」および「貿瞍」、視覺障害・盲目である「瞽瞍」、腫瘤・腫瘍一般や頸部の腫瘤・腫瘍を意味する「瘤瘻」である。これらの中で足陽明脈の「脞瘦」として他を凌ぐほどの適格性を持つものは見あたらない。このような場合、「脞瘦」の意味を檢討するに當たって假定條件の少なかったものを選ぶことが妥當である。そのようなものとしては「脞瘦」ないし「痤搔」があり、最終的には「脞瘦」が殘ることになるが、「痤搔」である可能性も劣りはしない。

（四）足少陰脈

●足少陰温〔脈〕、出內踝寠〔婁〕中、上貫膊〔腨〕、入卻〔郄〕（i）、出股、入腹、循脊內□兼〔廉〕、出肝〔骭〕、入胠、毄〔繫〕舌□其病、病足熱、膊〔腨〕內痛、股內痛、腹街〔伏瘕〕（ii）、脊內兼〔廉〕痛、肝〔骭〕痛、心痛、煩心、洇〔咽〕□□□□舌輅〔坼〕□旦〔疸〕（iii）尙□□□數喝〔渴〕、牧牧〔默默〕耆〔嗜〕臥以欬、□〔●〕【諸】病此物□□□〔者、皆久〔灸〕〕足少陰□〔温〔脈〕〕

（i）郄――帛書は「卻」に作り、これは「却」と同じであるから、「胠」と偏旁を逆にした字と言える。『病方』『帛書』はこれを「胳」と翻字するが、『張家山漢墓竹簡』一六〇頁（文物出版社、二〇〇一年一一月）は「胠」の一例として、この部分を掲げる。「胠」は脇あるいは脇の下を意味するから、經脈の走向から見て、前に位置する「膊〔腨〕」すなわちフクラハギと、後に位置する「股」の間の部位としては、そのままの意味では適切でない。『集韻』入聲二〇陌に「郤郄、或作郄」とあり、この「卻」は「郤」すなわち「郄」の異體字と考えられる。また、この字が「胠」とす

れば、溪紐・鐸部であり、溪紐・魚部の「郄」とは雙聲・入陰對轉の關係にあり、通假が考えられる。いずれにせよ、意味的には「郄」すなわちヒカガミ（膝の後ろ）を表す。なお、この足少陰脈の走向で、後文に「入胠」とあるものは脇あるいは脇の下を意味する。その「胠」は偏の「月」と旁の「去」から成り、ここの「胡」と異なる。[9]

（ii）伏瘕――帛書は「伏瘕」を「腹街」に作る。『病方』『帛書』『校釋』は鼠蹊部とし、『考注』『（壹）』は鼠蹊部中央ないしそこに位置する氣街穴とする。「腹街」を部位名稱と考えることは妥當であろう。しかし、前後が疾病ないし症狀の記述である中に、唯一「腹街」だけが部位を示す言葉であるのは他の十經の記述例から見ても特異である。この前後と同樣に疾病ないし症狀を示す言葉と推定するのが妥當である。そこで考えられるのは「腹街」の後に「痛」「腫」などが脱落しているか、「腹街」が何かの假借か、いずれかである。『素問』『靈樞』『甲乙』『諸病源候論』などの古典には、「腹街痛」「腹街腫」などの症候名が見えないばかりでなく、「腹街」そのものも見えない。このことから「腹街痛」「腹街腫」の「痛」「腫」が脱落したものである可能性は小さい。殘る可能性は假借である。徐幹『中論』曆數は、『左傳』哀公一二年の「火伏而後蟄者畢」を引用して「火復街而後蟄者畢」に作り、竝紐・職部の「伏」と竝紐・覺部の「復」の通假を示す。であるならば、「復」の諧聲字で幫紐・覺部の「腹」と「伏」も通假すると推定できる。『同源字典』一〇七頁によれば、溪紐・支部の「奎」と溪紐・魚部の「胯」「跨」は雙聲・支魚旁轉の關係にある。であれば、「奎」の諧聲字である見紐・支部の「街」と見紐・魚部の「瘕」も雙聲・支魚旁轉の關係にあると推定できる。つまり、「腹街」は「伏瘕」の通假字と考えられる。なお、「伏瘕」は、『素問』氣厥論「小腸移熱於大腸、爲虚瘕爲沈」の王注に「虚與伏同」によれば、「虚瘕」とも書く。『毛詩』小雅「楚茨」の「苾芬孝祀」を釋玄應『一切經音義』卷一四「四分律」卷三一に引く『韓詩』は「馥芬孝祀」に作る。つまり、「腹」の諧聲字「馥」と「虚」の諧聲字「苾」が通假するのであり、「腹街」が「伏瘕」のみならず「虚瘕」と通假する傍證となる。「伏瘕」は、『素問』氣厥論に「小

腸移熱於大腸、爲慮瘕爲沈」と見える「慮瘕」と同じである。腹腔下部の腫瘤を指すと考えられる。

（iii）□疸――帛書は「旦」に作り、『甲本』『張家山本』は「癉」に作り、『乙本』は「單」に作る。『校釋』は「癉」が定紐・元部、「旦」が端紐・元部であることから、「旦」を借りて「癉」としたとする。經脈篇の足少陰脈には「黃疸」が見え、「疸」は「旦」と諧聲字で兩者は雙聲・疊韻であり、「旦」は音韻的には「癉」より「疸」に近い。從って、ここは先ず「疸」の假借と考えるべきである。ただ、『山海經』西山經の「服之已癉」の郭璞注に「黃癉病也、音旦」とあり、また一般に『靈樞』より古態を存する場合が多い『太素』經脈聯環の足少陰脈は「黃疸」を「黃癉」に作り、「黃癉」は『甲本』『張家山本』の「癉」に繫がる。このことから「旦」を借りて「癉」としたとの推定も充分成立する。「疸」と「癉」は秦漢以前の古籍では異なる二文字であったが、後に混同されたと、『校釋』は『陰陽』の注で云う。同じ少陰脈で『足臂』が「疸」に近い「旦」に作り、『甲本』『張家山本』が「癉」に作ることからすると、秦漢代から既に混同していたことも考えられる。『足臂』の意圖は「疸」「癉」のどちらにあったのか、にわかには決しがたい。「疸」「癉」どちらであるかの手掛かりを現存の代表的な醫古文の用例で考察する。

「疸」は『素問』において「黃疸」として三例[10]、「胃疸」として一例[11]、『靈樞』において「黃疸」として三例[12]が使用される。『素問』『靈樞』において、「癉」は癉[13]、癉熱[14]・癉病[15]・暴癉[16]・脾癉[17]・膽癉[18]・癉瘧[19]・黃癉[20]・消癉[21]として使われる。「黃癉」は後出の運氣論においてのみ使われる。

『素問』『靈樞』の「黃疸」、『太素』において『素問』に對應するもの〔卷一五尺寸診の二例、卷三〇久逆生病〕は「黃疸」に作り、『靈樞』に對應するもの〔卷八經脈聯環の二例、卷一六雜診〕は「黃癉」に作る。『素問』の「胃疸」、『太素』卷一五尺寸診も同じく「胃疸」に作る。つまり、『太素』は『素問』の「疸」を同じく「疸」に作り、『靈樞』の「疸」を「癉」に作る。これは『太素』に集められた『素問』と『靈樞』の元資料が明らかに系統の異なるものであっ

たことを示すものと思われる。

『素問』『靈樞』の「黄疸」、『甲乙經』は『素問』の三例の「黄疸」の内の二例を「黄癉」〔卷一一、五氣溢發消渴黄癉六の二例〕に作り、一例を「貫疸」〔卷一一、陽厥大驚發狂癇二〕に作る。『靈樞』の三例の「黄疸」の内の二例を同じく「黄疸」〔卷二二、經脈絡脈支別一上の二例〕に作り、一例を「黄癉」〔卷一一、五氣溢發消渴黄癉六〕に作る。『太素』と逆の傾向が見られる。『素問』の「胃疸」は『甲乙』に見えない様である。

『素問』『靈樞』の癉・癉熱・癉病・暴癉・脾癉・膽癉・消癉・癉瘧で『太素』『甲乙』に存在する者は、すべて『素問』『靈樞』と同じく作る。

以上を纏めると、『素問』『靈樞』『太素』『甲乙』の「疸」と「癉」に關して、異同は「黄疸」と「黄癉」の間に認められ、癉・癉熱・癉病・暴癉・脾癉・膽癉・消癉・癉瘧において異同は認められない。この結果に、『說文』七篇下疒部の「癉、勞病也、从疒單聲」と「疸、黄病也、从疒旦聲」を合わせて考察すると、勞病である「癉」については「癉」と表記されたが、黄病である「疸」については「疸」あるいは「癉」と表記されたと推定できる。一方、『足臂』が「旦」に作り、『甲本』『張家山本』が「癉」に作った少陰脈において、經脈篇や經脈聯環は「黄疸」あるいは「黄癉」として受入れ、傳承したと推定できる。であるならば、この「旦」あるいは「癉」は黄病の「疸」の假借と考えるのが最も適切である。以上から「疸」を是とする。

『素問』平人氣象論一八の「溺黄赤安臥者、黄疸」「目黄者曰黄疸」、『靈樞』論疾診尺七四「身痛而色微黄、齒垢黄、爪甲上黄、黄疸也」、『說文』七篇下疒部の「疸、黄病也、从疒旦聲」によれば、「疸」は目・額・爪などが黄色みを帶びる病氣である。なお、「□旦」は「黄疸」である可能性がある。

（五）　足厥陰脈

●足巻〔厥〕陰温〔脈〕、循大指閒、以上出胻內兼〔廉〕、上八寸、交泰〔太〕陰脈、□股內、上入脛閒（i）。其病、病脛瘦〔搔〕、多弱〔溺〕、耆〔嗜〕飲、足柎〔跗〕種〔腫〕、疾〔疚〕畀〔痹〕（ii）。●諸病此物者、□〔久〕〔灸〕〕巻〔厥〕陰温〔脈〕、皆有此五病者、有〔又〕煩心、死。三陰之病亂、□〔不〕過十日死。揗温〔脈〕如三人參脊、不過三日死。溫〔脈〕絕如食頃、不過三日死。煩心、有〔又〕腹脹、死。不得臥、有〔又〕煩心、死。唐〔溏〕□〔泄〕恆出、死。三陰病雜以陽病、可治。陽病北〔背〕如流湯、死。陽病折骨絕筋而无〔無〕陰病。不死。

（i）脛閒――『病方』以下、帛書の字を足陽明脈の「其病」に有るものと同じと見て、「脛」と讀み、「胫」と解す。「睉」と讀むことに異論はないが、足陽明脈の「脛」は人が背中を向け合った「北」に從うのに對し、ここの「脛」は「夾」字の様に二人が向き合うという違いがあることに留意すべきである。足陽明脈の「脛」は檢討の結果「脛」ないし「痤」に絞り、最終的に「脛」と解したが、ここも同じで良いとは卽斷できない。足厥陰脈は經脈篇によれば目系に聯なる。從って、この「脛」が小目の「睉」である可能性はある。しかし、『足臂』において足陽明脈は頭部に至ることが明記されているのに對し、足厥陰脈では「□股內」の上は「脛閒に入る」という記述があるだけで、「脛閒」が頭部であるかどうか不明である。假に「脛閒」の「脛」が頭部であるとすると、體幹部が全く觸れられず、記述が大腿部〔□股內〕から一氣に頭部に飛ぶことになり、『足臂』における他の脈の記述と著しくバランスを缺く。つまり、「脛閒」を體幹以下と考えるのが妥當である。

『毛詩』小雅「鴛鴦」に「摧之秣之」とあり、毛傳に「摧、莝也」、鄭箋に「摧、今莝字」とある。『說文』小徐本・

草部莖字に「按詩曰、秣之剉之、則此莖字」とある。『白孔六帖』巻二九「馬」は『詩經』を引いて「秣之秣之」に作る。つまり、歌部の「坐」の諧聲字は微部の「摧」と通假する。「摧」字は人體部位を表す意味を持たないが、「摧」と同じく齒頭音の聲紐「精」を持ち、韻部が「摧」と同じものに「朘」がある。『老子』五五章に「未知牝牡之合而全立」とあり、『釋文』は「全如字、河上作疌、子和反、本一作朘、說文、子和反、又子壘反、云赤子陰也、字垂反」という。「赤子陰」は幼兒の陰莖である。「朘」は成人男子の陰莖をも指すことができると思われるが、特に「赤子」に限定するのは、成人に對しては現在でも陰莖とか陰器とか性器と云ったような比較的穏やかな表現を用いて、子供などが使う「ちんぼこ」などという俗な表現は避けるのと同じことであろう。足厥陰脈の「脞」は陰莖、ないしもう少し廣く外生殖器を指す。「坐」の諧聲字が直接「朘」と通假するのではなく、「摧」を介して通假することに問題が生じる餘地が殘されているが、『集韻』平聲戈第八には「朘」と「脞」が同音で排されており、問題はないであろう。

足陽明脈の「脞」とこの「脞」に字體の相違があることを既に述べたが、この字體の相違は兩者の意味の相違を暗示しているのかも知れない。なお、この足厥陰脈の「脞」の解釋は結果的に『考注』所引の趙有臣氏の所說と同じことになる。

(ii) 疚痹——帛書は「疚」を「疾」に作る。『病方』『帛書』以下、「疾」字のままで是とし、「疾」について、『研究』は「はげしい」、『考注』は「患う」、『校釋』は「罹っている(病氣)」、とそれぞれ譯す。「疾」を「急性の」と譯すことも可能である。ここは動詞とすべき所ではないから、「はげしい」か「罹っている」か「急性の」かのどれかが適切で、三者の內では「はげしい」と「急性の」が勝ると思われる。帛書は二字目を「畀」に作る。『病方』『帛書』に從い、「痹」と解す。「痹」は『素問』痹論によれば、風・寒・濕の三氣が複合して病因となる病氣である。『足臂』にしても『甲本』『乙本』にしても、そこに記述された言葉が『素問』『靈樞』などの古典に繼承されていることが多い。この觀

點から「疾畀」を検討してみると、『周易』履卦「彖傳」の「履帝位而不疚」の『釋文』に「疚、陸本作疾」と云い、『禮記』中庸の「行前定則不疚」を『孔子家語』哀公問政第一七は「行前定則不疾」に作る。つまり、「疾」と「疚」は通假する。「疚痹」は見えないが、「久痹」は『靈樞』論疾診尺に「多黑爲久痹」と見える。『釋名』釋疾病に「疚、久也、久在體中也」とあるように「疚」と「久」は音韻的に通假し、かつ病の「久」しいものが「疚」である。「疾」のままで「はげしい」あるいは「急性の」と讀むのが良いのか、「疚」「久」の假借として「慢性の」と譯すのが良いのか、いずれにおいても決定的な根據はない。「久」は『靈樞』に見える點、可能性が高いので、「疚」を選擇する。

（六）臂太陰脈

臂、臂泰〔太〕陰温〔脈〕、循筋上兼〔廉〕、以奏〔湊〕（i）臑內、出夜〔腋〕內兼〔廉〕、之心。●其病、心痛、心煩而意〔噫〕。●諸病此物者、皆久〔灸〕臂泰〔太〕陰温〔脈〕、

（i）湊――帛書は「奏」に作る。『病方』『帛書』に從い、「湊」と解す。「奏」「湊」は諧聲字で通假する。『研究』は『淮南子』精神訓「衰世湊學」の高誘注「湊、趨也」、及び『說文通訓定聲』の「湊、假借爲走」を引く。『考注』『校釋』は「奏」と直接通假することを根據に「走」と解す。「走」は經脈篇に經脈經別の流注を示す表現として使われるが、十五別絡中の九別絡の他經への「別走」が九例[22]、十五別絡中の手太陽之別と足少陰之別の「其別者」の走行を示すものが二例[23]、十二經脈中の三焦手少陽脈と膽足少陽脈の「其支者」の走行を示すものが二例[24]、十二經脈中の腎足少陰脈の「起于小指之下、邪走足心」というものが一例である。腎足少陰脈を除けば、「別走」か「其別者」か「其支者」

かであり、「走」とは經脈の流注の幹線ではなく、枝分かれする支線の走行を表現するものと考えられる。腎足少陰脈の場合は、幹線ではあるが、直行するのではなく、幹線から派生する支線の様に「ななめに」進むために「走」が使われたと推定できる。とすれば、經脈篇において「走」とは支線ない支線的な流注を表現する言葉と總括できる。この臂太陰脈において「湊」は支線的流注の表現でないことは確實である。したがって、「走」である可能性は無いといえる。

三　おわりに

中國傳統醫學の研究に不可缺の文獻が『素問』『靈樞』である。その『素問』『靈樞』について、成立時期を早いものは戰國時代、遲いものでは後漢時代とするいくつかの論考が發表されてきた。それらの論考は傳承文獻との比較に基づいて成立時期を推定するものであったが、馬王堆醫書の出土は『素問』『靈樞』の成立時期の研究に考古學的典據を與えるものであった。馬王堆醫書の研究は中國・日本で盛んに行われているが、それは少なくとも中國傳統醫學を受け入れた東アジアには廣がりを持ち、ひょっとすると全世界的にも研究が行われているのではないかという感じを私は持っていた。最近、このような個人的印象を持つ私に取ってショッキングな資料を手にした。それは茨城大學人文學部の眞柳誠教授から頂いた講演用の資料である。眞柳教授は日本・中國に止まらず、韓國・ヴェトナム・モンゴルなどの醫學文獻や傳統醫學研究を調査し、中國古代醫學を現在でも熱心に研究しているのは、本家中國と日本だけであるとし、その理由を何點か提示している。詳細はいずれ發表されるであろう眞柳教授の論考を待たねばならないが、示唆に富む一文であった。

本稿は出土資料研究であるが、絶えず『素問』『靈樞』『太素』を意識しながら推論を行っている。山田慶兒氏が指摘

していることだが、『素問』『靈樞』『太素』において「論文相互間にはしばしば理論的立場や學說や治療法のちがいがみられるし、一つの論文が他の論文の說を繼承して發展させたり、逆に批判して異說を提出したりしていることも、決してすくなくない」。このために『素問』『靈樞』『太素』には理解に苦しむ表現・章句が少なくないのである。馬王堆醫書の正確な解讀はこれらの醫學古典の解明に役立つ筈であるが、今後は眞柳教授の言葉を嚙みしめつつ、研究を進めたいと思う。

注

(1) 『陰陽十一脈灸經文字攷』(『大東文化大學漢學會誌』四二號、二〇〇三年三月)。

(2) 『文物』一九七五年第六期所揭。

(3) 本稿「(五) 足厥陰脈」の「溫〔脈〕絕如食頃、不過三日死」。『帛書』足臂十一脈灸經の寫眞版二三行。

(4) 「『黃帝內經』の成立」一〇二頁(『思想』、一九七九年八月號)。

(5) 膝後兩傍、大筋雙上、股之後、兩筋之間、橫文之處、努肉高起、則郄中之分也。古中誥以膕中爲太陽之郄。

(6) 尋此經郄中主治、與中誥流注經委中穴正同、應郄中者、以經穴爲名、委中、處所爲名、亦猶寸口脈口氣口、皆同一處爾。

(7) 刺瘧論「不已、刺郄中盛經出血、又刺項已下俠脊者必已」、王注「竝足太陽之脈氣也。郄中、委中也。俠脊者、謂大杼・風門熱府穴也」

刺腰痛論「足太陽脈令人腰痛、引項脊尻背如重狀、刺其郄中太陽正經出血、春無見血」、王注「郄中、委中也。在膝後屈處膕中央約文中動脈、足太陽脈之所入也」。

刺腰痛論「解脈令人腰痛如引帶、常如折腰狀、善恐、刺解脈、在郄中結絡如黍米、刺之血射以黑、見赤血而已」、王注「郄中則委中穴、足太陽合也。在膝後屈處膕中央釣文中動脈」。

刺腰痛論「腰痛俠脊而痛至頭、几几然、目眩眩欲僵仆、刺足太陽郄中出血」、王注「郄中、委中」。

(8) 『靈樞』癰疽に「發於腋下赤堅者、名曰米疽、治之以砭石、欲細而長、疏砭之、塗以豕膏、六日已、勿裹之、其癰堅而不潰者、爲馬刀俠瘿、急治之」とある。

(9) 注①所揭の拙稿九四頁參照。
(10) 平人氣象論一八「溺黃赤安臥者、黃疸」および「目黃者、曰黃疸」、通評虛實論二八「黃疸、暴痛、癲疾厥狂、久逆之所生也」。
(11) 平人氣象論一八「已食如飢者、胃疸」。
(12) 經脈一〇「是主脾所生病者、舌本痛、體不能動搖、食不下、煩心、心下急痛、溏瘕泄、水閉、黃疸、不能臥、强立、股膝內腫厥、足大指不用」および「是主腎所生病者、口熱、舌乾、咽腫、上氣、嗌乾及痛、煩心心痛、黃疸、腸澼、脊股內後廉痛、痿厥嗜臥、足下熱而痛」、論疾診尺七四「而色微黃、齒垢黃、爪甲上黃、黃疸也」。
(13) 『素問』脈要精微論一七「癉成爲消中」、玉機眞藏論一九「病名曰脾風、發癉、腹中熱、煩心、出黃」。
(14) 『素問』擧痛論三九「熱氣留於小腸、腸中痛、癉熱焦渴、則堅乾不得出」、論疾診尺七四「冬傷於寒、春生癉熱」、刺節眞邪七五「癉熱消滅、腫聚散亡、寒痺益溫、小者益陽、大者必去」。
(15) 『靈樞』歲露論七九「四月巳不暑、民多癉病」。
(16) 『靈樞』寒熱病二一「暴癉內逆、肝肺相搏、血溢鼻口、取天府」。
(17) 『素問』奇病論四七「帝曰、有病口甘者、病名爲何、何以得之、岐伯曰、此五氣之溢也、名曰脾癉」。
(18) 『素問』奇病論四七「帝曰、有病口苦、取陽陵泉、口苦者、病名爲何、何以得之、岐伯曰、病名曰膽癉」。
(19) 『素問』瘧論三五「其但熱而不寒者、陰氣先絕、陽氣獨發、則少氣煩寃、手足熱而欲嘔、名曰癉瘧」および「帝曰、癉瘧何如、岐伯曰、癉瘧者、肺素有熱、氣盛於身、厥逆上衝、中氣實而不外泄、因有所用力、腠理開、風寒舍於皮膚之內、分肉之間而發、發則陽氣盛、陽氣盛而不衰、則病矣、其氣不及於陰、故但熱而不寒、氣內藏於心、而外舍於分肉之間、令人消爍脫肉、故命曰癉瘧」。
(20) 『素問』六元正紀大論七一「四之氣、溽暑至、大雨時行、寒熱互至、民病寒熱嗌乾、黃癉鼽衄飲發」および「四之氣、溽暑濕熱相薄、爭於左之上、民病黃癉而爲胕腫」。
(21) 『素問』通評虛實論二八「帝曰、消癉虛實何如」および「凡治消癉仆擊、偏枯痿厥、氣滿發逆、肥貴人、則高粱之疾也」。『靈樞』邪氣藏府病形四「心脈…微小、爲消癉」「肺脈…微小、爲消癉」「肝脈…微小、爲消癉」「脾脈…微小、爲消癉」「腎脈…微小、爲消癉」、同書師傳二九「夫中熱消癉則便寒、寒中之屬則便熱」、同書五變四六「余聞百疾之始期也、必生于風雨寒暑、循毫毛而入腠理、或復還、或留止、或爲風腫汗出、或爲消癉、或爲寒熱、或爲留痺、或爲積聚」「黃帝曰、人之善病消癉者、何以候之、少兪荅曰、五藏皆柔弱者、善病消癉」「此人薄皮膚、而目堅固以深者、長衝直揚、其心剛、剛則多怒、怒則氣上逆、胸中畜積、血氣逆

留、膚皮充肌、血脈不行、轉而爲熱、熱則消肌膚、故爲消癉」、同書本藏四七「心脆、則善病消癉熱中」「肺脆、則苦病消癉易傷」「肝脆、則善病消癉易傷」「脾脆、則善病消癉易傷」「腎脆、則苦病消癉易傷」。

(22) 手太陰之別、名曰列缺、起于腕上分閒、竝太陰之經、直入掌中、散入于魚際、其病實則手銳掌熱、虛則欠㪅、小便遺數、取之去腕半寸、別走陽明也。

手少陰之別、名曰通里、去腕一寸半、別而上行、循經入于心中、繫舌本、屬目系、其實則支膈、虛則不能言、取之掌後一寸、別走太陽也。

足太陽之別、名曰飛陽、去踝七寸、別走少陰。

足少陽之別、名曰光明、去踝五寸、別走厥陰、下絡足跗。

足陽明之別、名曰豐隆、去踝八寸、別走太陰。

足太陰之別、名曰公孫、去本節之後一寸、別走陽明。

足少陰之別、名曰大鍾、當踝後繞跟、別走太陽。

足厥陰之別、名曰蠡溝、去內踝五寸、別走少陽。

督脈之別、名曰長强、挾膂上項、散頭上、下當肩胛左右、別走太陽、入貫膂。

(23) 手太陽之別、名曰支正、上腕五寸、內注少陰、其別者、上走肘、絡肩髃。足少陰之別、…其別者、并經上走于心包、下外貫腰脊。

(24) 三焦手少陽之脈、起于小指次指之端、上出兩指之閒、循手表腕、出臂外兩骨之閒、上貫肘、循臑外、上肩而交出足少陽之後、入缺盆、布膻中、散落心包、下膈、循屬三焦。其支者、從膻中、上出缺盆、上項、繫耳後、直上出耳上角、以屈、下頰、至䪼。其支者、從耳後、入耳中、出走耳前、過客主人前、交頰、至目銳眥。

膽足少陽之脈、起于目銳眥、上抵頭角、下耳後、循頸行手少陽之前、至肩上、却交出手少陽之後、入缺盆。其支者、從耳後、入耳中、出走耳前、至目銳眥後。